

『旧石器考古学』78 拠刷

旧石器文化談話会編

2013年9月発行

〔書評〕

マイケル・R・ウォーターズ著 (松田順一郎・高倉純・出穂雅実・別所秀高・中沢祐一訳)

『ジオアーケオロジー：地学にもとづく考古学』

上 峯 篤 史

[書評]

マイケル・R・ウォーターズ 著／松田順一郎・高倉 純・出穂雅実・別所秀高・中沢祐一 訳

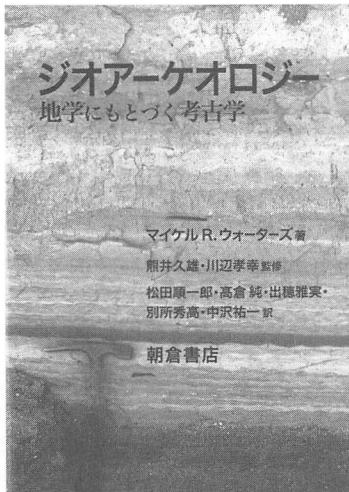
『ジオアーケオロジー：地学にもとづく考古学』

上峯 篤史

(日本学術振興会・京都大学)

2012年7月20日発行 朝倉書店

A5判 352頁 本体6,400円+税



I はじめに

2007年、評者が同志社大学構内遺跡の発掘調査に参加していた折、本書の訳者の一人である松田順一郎氏が来訪された。氏は発掘現場に設けられた畦や深掘区に見える土層を題材に、砂や礫が堆積して遺跡を覆っていく過程を詳細に語り始めた。その話はたちまち私たちを魅了し、見慣れた発掘現場が急に違った景色に見えてきた。興奮した私たちが、どのように勉強すれば考古学に役立つ地球科学の知識が得られるのかを尋ねたところ、「まさに今、そのための本を翻訳中である」との答えが返ってきた。以来、松田氏らの連載原稿（松田 2007・2008、別所・松田 2007、松田ほか 2007）をはじめとする関連文献に触れるたび、遺跡調査に関わる地球科学の知識を体系的に学びたいという思いを強くしてきた。そして昨年7月、それは本書の刊行によって適えられることとなった。

本書は、1992年にアメリカで刊行された“Principles of Geoarchaeology: A North American Per-

spective”を邦訳したものである。本書では遺跡を覆う堆積物、層序や堆積作用、遺跡形成過程と景観復元、埋没後の擾乱など、考古学に適用可能な地球科学の知識が解説されている。著者の Michael R. Waters 氏はテキサス A&M 大学人類学・地理学教室教授で、ジオアーケオロジーはもとより、第四紀後期の地学やパレオ・インディアンの考古学的研究、先史時代農耕民を取り巻く景観変化の研究に関する業績も豊富である。氏が取り組んできた一連の研究プロジェクトの成果も、本書には大いに取り入れられている。

II 本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

- 第1章 ジオアーケオロジー
- 第2章 ジオアーケオロジーの基礎
- 第3章 沖積環境
- 第4章 風成環境
- 第5章 温泉、湖、岩陰、その他の陸域環境
- 第6章 海岸環境
- 第7章 遺跡の埋没後擾乱
- 第8章 ジオアーケオロジーにおける調査研究

III 本書の内容

本書の口火を切る第1章では、ジオアーケオロジーのあらましと、主な研究目的が述べられている。著者によれば、ジオアーケオロジーの目的とは遺跡を時間コンテクストに位置づけること、遺跡形成の過程を理解すること、遺跡（集落）を取り巻いていた景観を復元することの3点にあるという。続いて考古学に関連する堆積学や土壤学、層序学の概念が説明され（第2章）、第3章以降を読み進めるための基礎知識が提供される。堆積物や土壤の性格、その生成プロセスや記

載の方法からはじまり、地層の岩相区分や堆積過程、層序の対比など、考古学の根幹に関わる知識が詳細に解説されている。「堆積物、土壤、層序のジオアーケオロジー的解釈」のチャプターからは、ジオアーケオロジーの全体像が窺い知れる。

第3章で解説される沖積環境は、日本列島に暮らす私たちにとって身近な事例だろう。河道の変化と堆積物の浸食・運搬・堆積、遺跡への影響が説明されている。ツソーン盆地のホホカム農耕集団の事例では、集落の選地や生業活動に河川景観が大きく影響を及ぼすことが述べられており、日本列島の先史時代遺跡の動態を読み解く上でも参考になろう。第4・5章ではそれぞれ、砂丘やレス地帯のような風成環境、泉や湖、斜面や氷河、岩陰や洞穴が対象となっており、堆積物の特徴と遺跡の形成過程、景観復元の実例が取りまとめられている。続く第6章では、海岸地形の形成過程、汀線の水位と遺跡立地との関係などが議論されている。第7章の対象は、考古遺物が埋没した後に被る攪乱である。攪乱の原因となり得る地層の凍結・融解、マトリクスに含まれる粘土鉱物の膨張、未固結の堆積物の重力移動、地層の変形作用、動植物による影響が解説される。日本考古学においてもじみの深い分野であろう（御堂島 1994、御堂島・上本 1988、亀井 2013など）。

終章となる第8章では、ジオアーケオロジーの視点と目的が通常の考古学との比較の上で解説される。ともすれば風変わりにとらえられるジオアーケオロジーが、考古学において大きく、そして具体的に貢献できることが確認され、本書は閉じられる。

IV 本書の特色

まず特筆すべきは、本書が考古学者のために書かれた地球科学の本であることだろう。記述対象は第四紀後期に限定されているし、層序学や土壤学、景観復元の方法が重点的に述べられている。専門用語を極力減らすことで、考古学者でも地球科学の事項を理解しやすいように工夫され、翻訳時にもそれは意識されている。本書は決して平易ではないが、丹念に読めば地球科学の素養がなくても理解できる内容である。各章の構成は基礎概念を解説した上で具体的な事例を紹介する順となっており、折々に掲載されている模式図は、本書を読み進めるうえで大きな助けとなる。写真も適宜挿入されているが、いずれもモノクロ写真のために理解が追いつかない部分があることが惜しまれる。

第二の特色は、本書がジオアーケオロジーに関する基礎知識の解説と、こうした調査が考古学にどのような貢献をなし得るかを明示する点に特化していることである。その反面、遺跡調査において具体的に何をすればよいのか、本書から学べることは多くない。本書をきっかけにジオアーケオロジーに関心を持った読者は、朝倉書店のホームページ上で公開されている文献リストを手がかりに関連文献に当たるのがよい。訳者らの研究成果も大いに参考になろう。

さらに、遺物が堆積物の一部となって、周囲の景観変化の影響にさらされていく過程に多くのページが割かれている点にも注目したい。菊池強一（2001）がいち早く指摘したように、こうした視点の欠如が旧石器遺跡発掘捏造事件の発覚を遅らせる原因となったことを忘れてはならない。

V おわりに

原著の副題が示すように、本書は北アメリカを主眼に置いて書かれている。したがって日本列島の遺跡には適用できない内容も当然含まれており、本書で解説される知識を盲信するわけにはいかない。とはいものの本書はあくまでジオアーケオロジーの「原理」を記した教科書であり、「例外」があろうと本書の価値は一向に損なわれない。本書から得た知識はフィールド調査に活用して初めて意味をなすし、私たちが日々向き合う遺跡こそが、ジオアーケオロジーを学ぶための最良の教材であることに異論はないだろう。

引用文献

- 亀井 翼 2013 「モグラによる遺物の埋没と埋没後擾乱」『第四紀研究』52-1、日本第四紀学会、pp. 1-12。
- 菊池強一 2001 「石器の産状は何を語るか」『科学』71(2)、岩波書店、pp. 160-165。
- 別所秀高・松田順一郎 2007 「発掘現場の地球科学(2)」『考古学研究』54-2、考古学研究会、pp. 94-97。
- 松田順一郎 2007 「発掘現場の地球科学(1)」『考古学研究』54-1、考古学研究会、pp. 104-107。
- 松田順一郎 2008 「発掘現場の地球科学(4)」『考古学研究』54-4、考古学研究会、pp. 108-111。
- 松田順一郎・辻 康男・井上智博 2007 「発掘現場の地球科学(3)」『考古学研究』54-3、考古学研究会、pp. 104-107。
- 御堂島正 1994 「踏みつけによる遺物の移動と損傷」『旧石器考古学』48、旧石器文化談話会、pp. 43-55。
- 御堂島正・上本進二 1988 「遺物の地表面移動」『旧石器考古学』37、旧石器文化談話会、pp. 5-16。